戦争を知らない世代へ⑩ 岩手編

平和の砦・釜石

創価学会反戦出版

戦争を知らない世代へ ⑩岩手編

平和の砦・釜石

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑩
平和の砦・釜石

昭和50年7月14日　初版第1刷発行
昭和50年7月20日　初版第2刷発行
編　者　創価学会青年部反戦出版委員会
発行者　山崎善智
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号　101　東京都千代田区猿楽町2－5－4
電話　東京(294)8731(代)　振替口座　東京117823
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社　星共社

0036－7010－4438

発刊によせて

戦争の悲惨さは、母から繰り返し聞かされてきた。というのは艦砲射撃の当時、私は釜石に住んでいた。砲弾の下、釜石の街は見るまに焼土と化していった。悪魔のようなうなりを発し、砲弾は、女、子供へとおそいかかっていた。周りは火の海となり、くずれおちる家屋、手足をもがれた人々の呻き声、父や母の名を呼ぶ子供達の声、恐ろしさのあまり、ふるえて動けぬ老婆。私は生後六ケ月で、火勢を逃れる為麻袋に入れられ、どぶの中につけられて助かったという。

病弱だった母は、細い体で私を背負って、竹やぶで衣服はちぎれ、全身傷だらけになり、はうようにして、幾つもの山を越え大槌町まで逃れていった。

あの時の母の機転がなければ私はこの世に存在しなかった。あの地獄の様な出来事は、二度と思い出したくないと語る母の姿に、戦争は二度と起こしてはならないと、思わずにはいられなかった。戦争は決して起こしてはならない。だが、悲惨な戦争体験が時とともに忘れ去られようとし、戦争を知らない世代が増えている。今こそ、この世代に戦争の悲惨さ、いまわしさを訴え、一人一人の心の中に反戦の砦を築かぬ限り、人類は又、同じ道を歩むであろう。

私達はこの願いを込めて、反戦出版に情熱を注ぎ込んできた。慣れぬ手つきでテープレコーダーを持ち、艦砲射撃の被災体験者を捜しては、一軒また一軒と訪ね歩いた。

ある婦人は涙を流しながら、「私の体験を通して二度とこの様なことにならぬよう、戦争を憎み、平和の大切さを世々代々に伝えていって下さい」と訴えた。またある壮年は、身をふるわしながら、「人間が人間を殺すという、馬鹿げた行為で犠牲になるのは私達庶民です。この体をみて下さい」と、不自由な体を、さし示した。

一人一人に哀しいドラマがあった。戦争体験者の痛切な生命の叫びによって、私達は確信をもった。吹雪をついて、どんな処へも歩きつづけた。きっとこの一冊の本が万波となり、反戦の大きな渦へ広がりゆくことを。私達の未熟さにもかかわらず、快くも出版の労をとってくれた方々、貴重な戦争体験を寄せてくれた方々に、心から尊敬と感謝の念を表します。

私達は、生涯、反戦平和の為に戦いぬくことを、更に決意し、ここに、『平和の砦・釜石』を発刊するものです。

昭和五十年七月

創価学会青年部

岩手県男子部長　中村博興

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

発刊によせて　1
今も夢みる、私の息子……柚木　ゑ　10
突然に襲われた鉄の都……野村フミ　12
すべてを失って……佐藤秀雄　16
砲弾そして機銃掃射……秋山富士子　17
昭和二十年八月九日……八重樫　孝　20
悲惨な戦争と戦おう……小野寺しず　22
廃墟と化した鉄の街……小林カヤ　25
毎日が生きることとの戦い……佐野よし　28
手当も受けられぬ戦傷者達……長沢正男　30
製鉄所に勤務して……高橋　儔　33
ある少年監視哨隊員の手記……K・N　35
艦砲射撃の雨……村岡日出夫　37
黒煙の中に太陽が燃える……石橋芳夫　40
砲弾の集中にあった壕……匿名　42

敵機でいっぱいの空……鳥居咲子 44
戦争、その酸鼻の極み……矢浦一郎 47
傷痕は今なお深く……阿部辰郎 51
火の海と化した中に母は……匿名 54
第一回第二回釜石艦砲射撃の記録より……奥寺正 56
生き残った私……小笠原哲男 60
肉親をうばわれた日……国分誠三 63
砲弾の下で……佐藤タツ子 65
今は歌えない赤トンボの歌……畠山サメ 68
すべてを失った私達……及川光子 70
夫の言葉が死から救った……佐々木ヨテ子 72
終戦が一週間早ければ……矢浦権三郎 77
生と死の青春時代……高橋ヤエ 79
生き埋めになった私……佐々木栄吉 81
遺族の願い……平野富三郎 83
戦況……匿名 84

食糧難との戦い……菊池カツエ 86
艦砲射撃……後藤　始 91
地獄の使い……菊池シゲ 93
一家心中を決意した私……大和田よし子 95
戦争で明け暮れた青春……八幡千恵子 97
朝礼に泣く姉と弟……前川　正 99
つれづれに思うこと……上田迪子 101
進駐軍におびえながら……藤原マサ 107
戦争が残した松葉杖……佐々木綾子 110
長かった二時間半……菅原昭一 112
もう戦争は嫌だ……横山やな子 114
戦後も続いた戦争……菊池ハナ 116
これで終わりだ!!……鈴木清八 118
常備消防隊の活動……匿　名 120
熱風は山の上まで……後藤庄三 122
恐るべき艦砲の威力……前田　武 125

愛国の名に奪われた命……草刈秀夫 127
悲しい出来事……匿名 130
戦争、この動物的なもの……佐藤タツ子 132
子供心に焼きついた恐怖……遠野キエ 133
米軍から聞いたこと……枡沢久一 134
幸運だった私……小山うめの 136
全てを失った二度の艦砲射撃……横田テル 138
恐怖の二時間……森田征記 140
土砂で丸坊主に……平松ヨシ 141
償われざる戦争……太田久兵衛 143
政府の嘘を見破ったものの……越智清子 145
切断された脚……菊池一之 147
焼死した夫……大竹喜江 151
腕を切断しないで……伊藤きくよ 154
我が子の死……二瓶喜代志 160
学徒動員されて……竹下ミツ 165

しらみだらけの青春……米谷カツ 169
学徒動員の青春……佐々木一成 171
焼けた米倉庫……工藤木作 173
花火の合図で消えた漁火……三浦　弘 179
左腕を切断した息子……八重樫　寿 183
奪われた左腕……八重樫　勉 188
召集令状の配布……川端長吉 191
心から消え去らない戦争……小池キネ 195
この世の地獄を見て……平松福二 197
帰ってきた娘……小川ゆき 204
空しく聞こえた神国思想……熊谷安三 206
『女子挺身隊』一員として……千田チエ 209
三十年前の悪夢……狩野繁男 211
敵機地上……小笠原弘 214
父親の顔を知らぬ子……松岡トラヨ 217
手だけを出して灰の中に……臼井達雄 222

二回目の艦砲射撃……小松　実　225
疎開学童日誌から……佐々木三男　228
あとがき……235

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

平和の砦・釜石

今も夢みる、私の息子

柚木（ゆのき）ゑ（71歳）

艦砲射撃が始まった時、私は子供達を防空壕へ入れるのに精一杯であった。しかし、男は防空壕などに入るものではない、という父の言いつけを守った長男だけは入らなかった。防空壕の中にいても、鼓膜が破れそうで生きた心地がまるでなく、私は夫と息子の無事をただ願うだけであった。

艦砲射撃が始まってから何時間が経過したのだろうか。確か夕方の四時だったか、周囲が静かになって、〝逃げるのは今だぞ〟と言う声がした。私は夢中で子供達を連れて嬉石の隧道へ逃げ込んだ。すると間もなく、再び艦砲射撃が始まった。それからしばらくして、夫が「しげる（長男）はどうした！」と駆け込んで来たのである。艦砲射撃の終了を待って私と夫は必死で息子を捜し始めた。もう無我夢中というのか、戦争どころではなかった。そして、我が家まで来た時、息子はそこに倒れていた。頭にひびが入り、血まみれの姿で……。

「しげる！」と叫んだきり、私はどうする術もなく、ただただ五体から全身の力が抜けていっ

てしまうのだった。それでも私は、夫の声で何とか我に返った。私達がどれほど深く悲しもうとも、事態が戦争であることに変わりはなかった。それで私は、松原の隧道へ子供達を連れて逃げ込もうとしたが、途中で敵機に見つかって、私達は機銃掃射に追われる身となった。もう、これで終わりか、と観念したが、幸い近くに大きな下水道があったので、そこに身を隠して機銃掃射から身をかわせたのである。

翌日、息子の遺骸を焼こうとしたが、あまりに突然の死に、無惨な思いが込み上げてくるばかりだった。息子が可哀想で……。当時、旧制釜石中学へ通う、数えで十五歳になる元気な子だった。それからというもの、毎日毎日、息子の夢を見る日が続いた。本当にやりきれなくて、情なくて、今でも遠くの方を眺めていると、あの元気なしげるの顔が浮かんでくる。

私は戦争が憎い。戦争を起こした人間の勝手なエゴを憎む。私の人生を滅茶苦茶に打ち砕いた戦争、もう二度と戦争を起こさないで下さい。

突然に襲われた鉄の都

野村（のむら）フミ（55歳）

両親を亡くした私は、妹と二人で叔母の家に身を寄せていました。そして、妹は船具店の事務員、私は病院の事務員として勤務しておりました。

その日は天気もよく、私の病院は家から六十メートルほどの距離でしたので、昼食をとりに帰っていました。昼食を済ませて、いつも持ち歩いているリュックを家に置いたまま、病院へ戻ろうと玄関に出たその時、「艦載機だ！」との叫び声がしました。空を見上げると、その艦載機が翼を振ったのです。と同時に、艦砲射撃の火ぶたが切られたのでした。ヒューン、弾丸の飛ぶ音、そしてものすごい炸裂音……。とにかく、近くにいた人達と病院の防空壕へ飛び込みました。とてつもない地響が壕の中に伝わって、恐怖におののきながら畳に身を伏せていたのです。

やがて外の方で、「火が近いから、すぐ防空壕から退避するように」との声に、壕から飛び出た私の目前に、むき出しになった両足がちぎれ飛んできました。あまりのむごたらしさに目をそむけたところ、病院の屋根の上にまた一本、大腿部からもぎ取られた片足が血まみれになって転

がっているのです。その当時、薬師山は椿の名所と言われて、大きな椿の木が沢山ありましたが、その根元に三十人とも四十人とも思える男の人や、赤ん坊を抱いた女の人などが、そこら中に折り重なって倒れていたのです。それは、この世のものとは思われぬ程の凄惨な光景でした。

山を越えながら眼下に見た叔母の家は、既に火の渦に呑みこまれて、その一帯が火の海でした。みるみるうちに街全体が炎と化し、道路は火のトンネルのように見えていました。私は逃げながらも、落伍しそうな人を引っぱったり、子供連れの人から子供を抱きかかえてあげたりしたものです。その間、機銃と弾丸の炸裂音に何度地へ伏せたかわかりません。避難先の鳥ケ沢トンネルは、鍋や釜の中にうずくまった人々で一杯でした。

ようやく艦砲射撃も収まり、私は海岸近くで勤務する妹の安否が気がかりでなりませんでした。夢中で辿り着いた大渡橋のたもとから見た荒漠たる光景は、とても筆舌に尽くせないものでした。履いているズック靴を通して感じる土の熱さ、放心した表情で歩いてる人、全身焼けただれた人、汚れた布で顔を押さえている人など、今思い出しても身の毛がよだちます。そして叔母の家に到着した私は、叔母の家族の消息がわからぬまま、そこに立ちつくしていました。その時、後から肩をポンと叩かれ、びっくりして振り返ると、無事な妹の姿がありました。「生きていたの！」二人の口から同時に出た言葉でした。お互いに、あの艦砲では生きていまいと思ってましたので、本当に夢のようでした。

この艦砲射撃で妹の会社の蔵も焼け落ち、荷物を全部焼いてしまったのです。建物はみな崩れ落ち、薄暗くなった焼け跡でこれからどうしようかと話していると、叔母の家に下宿していた放送局の人が、私のリュックを持って現われたのです。それには驚きました。その人は、あの時ちょうど家にいて、とっさに私の置いてきたリュックを持って難を逃れたのだそうです。現在の釜石市立幼稚園の場所に建っていた放送局も弾丸を受けて焼け落ちた、とのことでした。

「一緒に死ぬことになるかもわからぬが、よかったら来なさい。」とその人から言われ、男女八名ほどの人達と一緒に私達は、釜石小学校へ避難しました。私達女性三名は、食事の手伝いなどしながら、しばらくの間寝起きを共にしました。その頃の話題といえば、誰それはどこで死んだとか、行方不明になったとかの、実に寒々としたことばかりでした。

第二回目（八月九日）の空襲の時は、皆と裏山へ逃げる途中で機銃に追われ、私は妹を窪みへ必死で突きとばしてその上に折り重なるように身を隠したのです。その時、一緒だった放送局の二人の方が更に上から覆い被さってくれたために九死に一生を得たりしました。また、私の直前を機銃の上煙が走り、もう駄目かと諦めかけたこともありました。そして、敵機に応戦する高射砲がなかなか命中せず、ただ浮かぶ白い煙がとても虚しく目に映ったものです。

夜は夜で、小学校へ避難していた老人や子供達は、少しの物音にもおびえ、緊張し、警報の度に神経をとがらせて眠れぬうちに夜明けを迎えるという状態でした。私は、人間がギリギリの極限

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c